

砂底須恵器の一考察

利 部 修

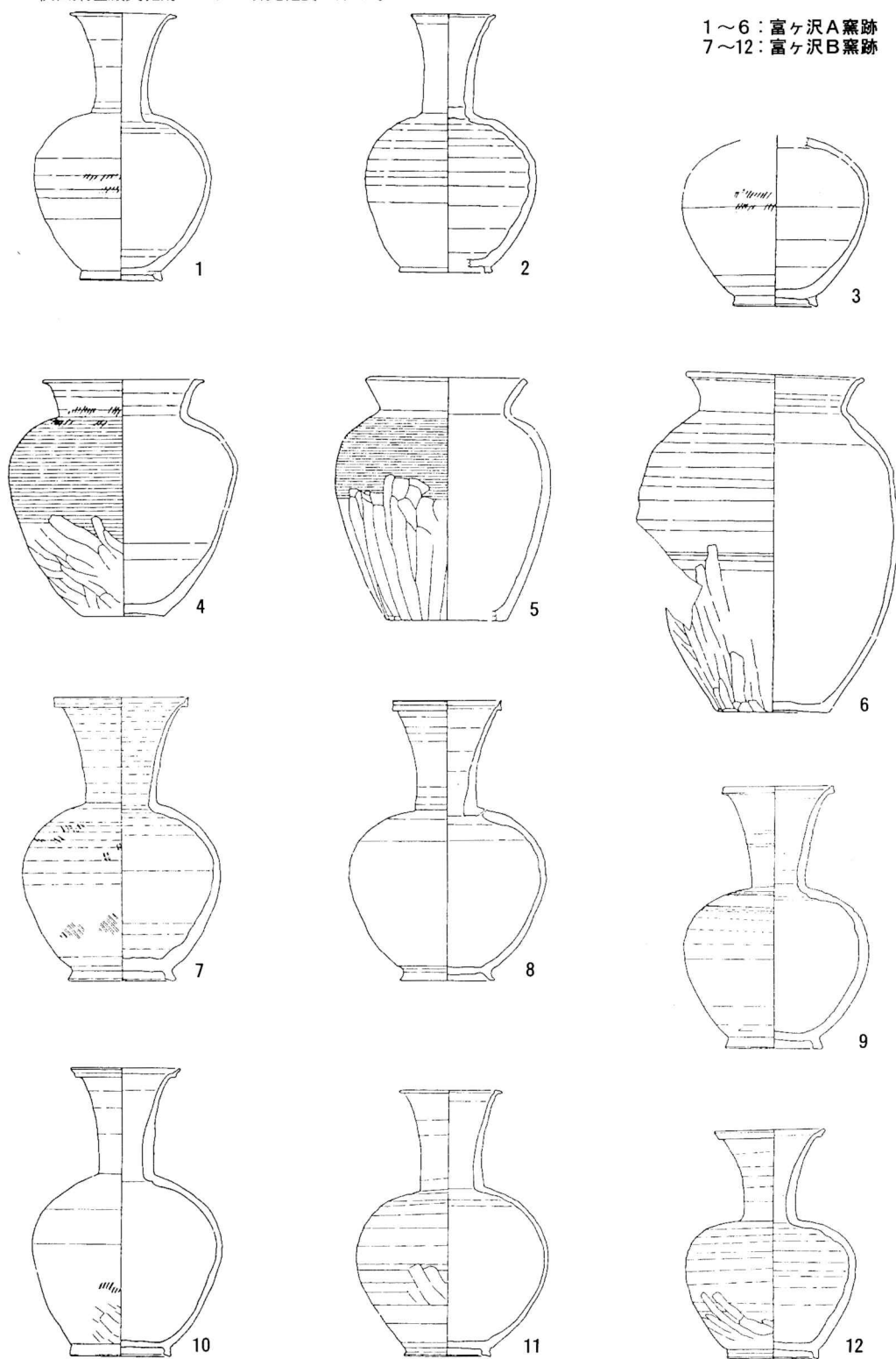
東北地方の北部には、底面に砂粒が付着している平安時代の土器が普遍的に存在している。この特徴をもつ土器は奈良時代にも僅かに認められるようであるが、中心は10世紀前半に考えられている灰白色火山灰を挟む前後の時期にあり、まれに北海道上磯町矢不來3遺跡のように7世紀後半頃とする報告例も知られている。^(註1)これらのことは、1993年櫻田隆氏が『『砂底』土器考』の中で指摘していることで、砂底土器の砂粒付着パターンの類型化とともにその分布領域の担い手について言及した研究成果によるものである。そこでは砂底土器を、878年に起こった「元慶の乱」の歴史背景や砂底土器が城柵で出土しないことから、「向化俘地」の住民を除く「夷俘」の土器と規定したのである。^(註2)

この論文の「砂底」土器出土遺跡一覧には、69遺跡から出土した砂底土器について器種とその個体数が詳細にまとめられている。それによれば、砂底土器には坏・鉢・鍋・甕の69遺跡406個体分が、砂底須恵器では壺・甕と米代・馬淵川流域以北の6遺跡6個体分が分析の対象にのぼっている。^(註3)このように、砂底須恵器の現状における類例は極端に少なく、砂底土器に對比した分布状態では客体的な在り方を示している。

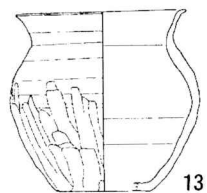
このなかであって、1990年秋田県教育委員会が調査を実施していた富ヶ沢A～C窯跡の豊富な須恵器の中に、ややまとまった数の砂底須恵器の存在することが後の観察で明らかになった。これらの須恵器は、米代・馬淵川流域以北のものと、雄物川流域のものとを比較するうえで良好な資料である。のみならず、秋田城跡や払田柵跡よりも南の方から出土した窯跡資料である点において注目されるものである。したがって、以下にはこれら富ヶ沢A～C窯跡の砂底須恵器を紹介するとともに若干の考察を加えることにしたい。

富ヶ沢A～C窯跡は秋田県横手市赤坂字富ヶ沢に所在し、それぞれS J 01、S J 101とS J 102、S J 201の須恵器窯跡4基が調査されている。これらの窯は、並列しているS J 101・102を基準にすると、S J 01は西へ約240m、S J 201は北東約160mの地点にある。さらにS J 201を基準にすれば、北東約160mには郷土館窯跡(1基)が、東南東約140mには田久保下遺跡のS J 301・302・303(3基)がそれぞれ存在している。これらの窯跡は、横手盆地最大の窯場と考えられる中山丘陵窯跡群の一角を占めるものである。^(註4)

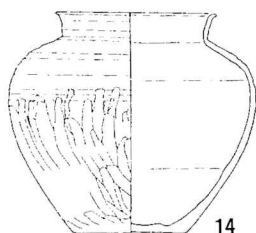
1～6：富ヶ沢A窯跡
7～12：富ヶ沢B窯跡



第1図 砂底須恵器資料(1)



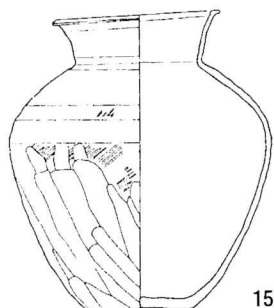
13



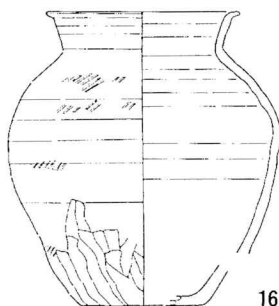
14

13～20：富ヶ沢B窯跡
21～23：富ヶ沢C窯跡

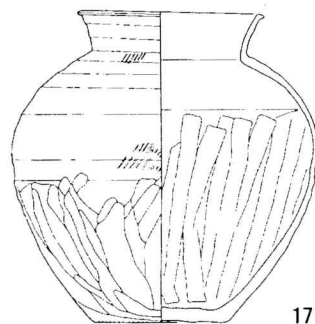
(図は註4の報告書より転載)



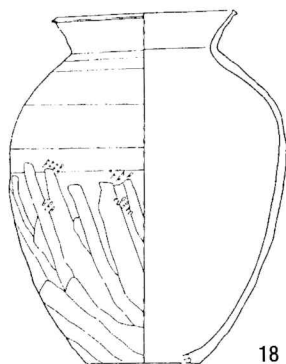
15



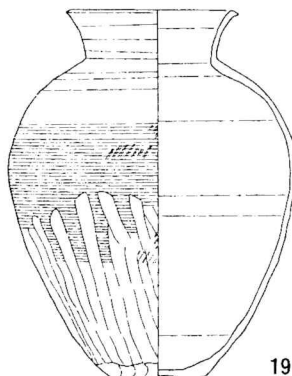
16



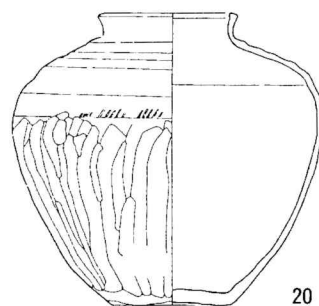
17



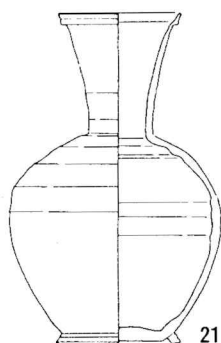
18



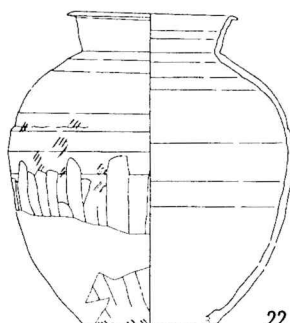
19



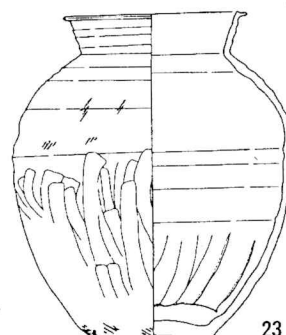
20



21



22



23

第2図 砂底須恵器資料(2)

砂底須恵器の掲載資料(第1・2図、図版1・2)には、長頸壺・短頸壺・甕の種類があり、これらは坏・蓋類の小物類を除く平底の製品に限られている。このことは、ロクロを用いた製作技法上の優位さと利便性に規制された結果であろう。挿図中の1～6(図版1-1～6)はS J 01灰原出土、7～20(図版1・2-7～20)はS J 101・102灰原出土、21～23(図版2-21～23)がS J 201灰原出土の資料である。この他に、図示できていないS J 01灰原の長頸壺があり(図版2-24)、これを含めると24個体の資料になる。さらに、S J 101・102灰原では9点の破片が確認できている。これらの砂粒の在り方には、底面の全面に顕著に認められる例(図版1・2-1・3・15・24)、周辺部だけに認められる例(図版2-17・19・21)、中央部に認められる例(図版1-7・12)などがある。加えて、微かに痕跡を留めているもの(図版1-2)や、砂粒の粗いものが多い中において細砂で黒色を呈しているもの(図版1-10)なども含まれている。また、底部の整形・調整手法との関連では、削り残された痕跡を留めているもの(図版1・2-6・23)、砂粒にナデが施されたもの(図版1・2-1・3・9・18)などがある。削り残しの例からは、底面の砂粒が削り取られ砂底須恵器と認識されていないものも、一定量含まれているものと予想される。

これらの砂底須恵器が焼成されている窯の年代は、報告者によってA・B窯跡が9世紀前葉から中葉、C窯跡が9世紀後葉と推定されているが、筆者はA～C窯跡を9世紀中葉を中心とする時期に想定している。^(註5)これらの年代観は、先に挙げた6遺跡の須恵器の年代よりも古く位置づけられる。一方遺跡の性格について、富ヶ沢A～C窯跡の須恵器が、古代の城柵官衙遺跡である払田柵跡に供給されている可能性を指摘したことがある。^(註6)さらに、9世紀初頭と見られる払田柵跡の創建期整地層からは、底面に砂粒が付着する短頸壺の出土が知られている。^(註7)このような点から、砂底土器における須恵器の存在は、時期的な観点では必ずしも客体的な在り方とは言えないのである。

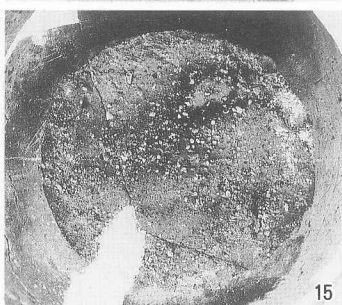
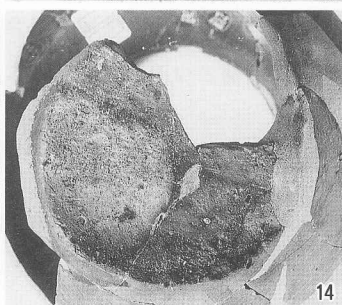
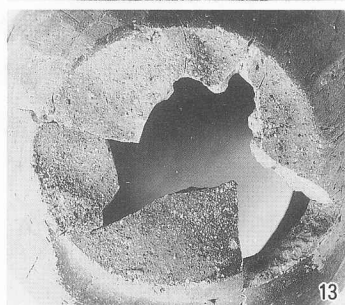
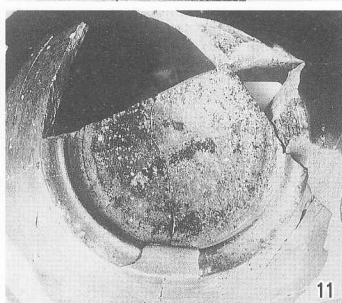
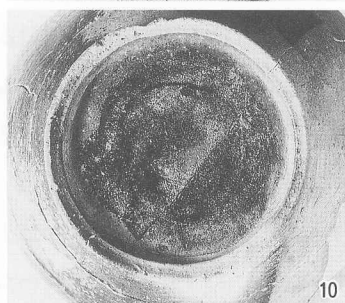
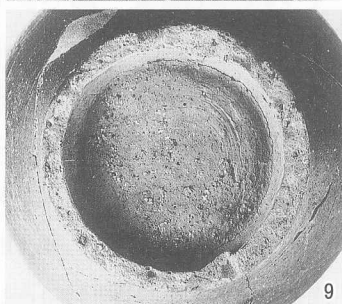
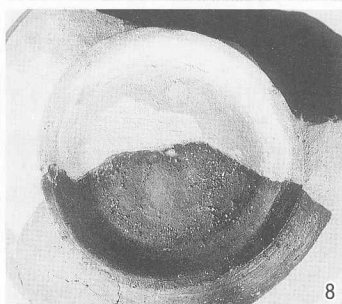
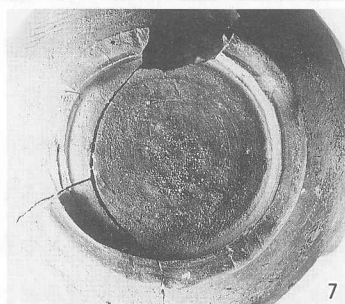
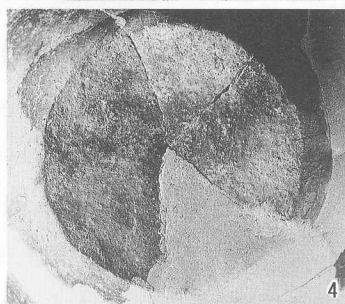
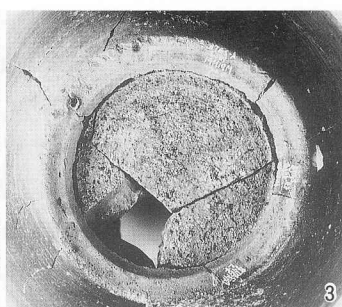
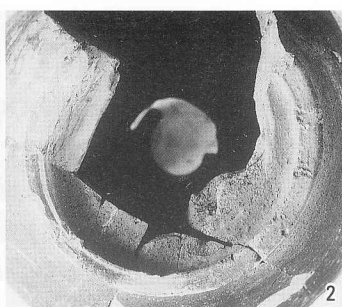
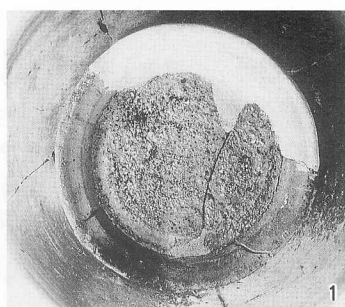
以上述べてきたように、砂底土器をもってすぐさま櫻田氏のいう「夷俘」の土器と捉えることはできず、むしろ富ヶ沢A～C窯跡の砂底須恵器では、氏の「向化俘地」の住民との関わりについて予見しているようにも考えられる。砂底土器の大半は、蝦夷を担い手とするであろうが、その発生期の実態については今後吟味する必要がある。そのためにも、砂底須恵器と砂底土器を対峙させた視点が望まれるし、砂粒を用いる製作技法上の解釈を整理することも大事な作業である。

小稿では櫻田論文から多くを学び、かつ、啓発されることの多かった点を付記する。

註

- 1 『矢不來 3 遺跡』上磯郡上磯町教育委員会 1989(平成元年)
- 2 櫻田 隆『『砂底』土器考』『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』1993(平成 5 年)
- 3 本文では、底面に砂粒が付着している土師器と須恵器を区分するために、それぞれ砂底土師器・砂底須恵器と呼称していく。表中に記載された砂底須恵器の出土遺跡には、青森県八戸市根城跡、同青森市三内遺跡(表の土師器は、須恵器の誤植)、同鰺ヶ沢町壱沢遺跡、岩手県江釣子村(現北上市)下谷地 A 遺跡、秋田県鹿角市一本杉遺跡、同能代市上ノ山Ⅱ遺跡がある。また、数を算出するにあたっては、個体数の不明なものを 1 と数え「+ α 」は数に含めていない。
- 4 秋田県教育委員会『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(第一分冊)・(第二分冊)秋田県文化財調査報告書第220集 1992(平成 4 年)
- 5 利部 修「秋田県・横手地方の須恵器編年」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会 1992(平成 4 年)
- 6 第21回古代城柵官衙遺跡検討会の口頭発表による(1995年 2 月)。
- 7 秋田県教育委員会『弘田柵跡』秋田県弘田柵跡調査事務所 1984(昭和59年)

図版 1
砂底須恵器の底面(1)



図版 2 砂底須恵器の底面(2)

